九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

石蓋土壙に關する覺書

鏡山, 猛

https://doi.org/10.15017/2335163

出版情報：史淵. 56, pp.161-186, 1953-03-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

石蓋土壙に關する覺書

鏡山　猛

目次

一、緒言
二、遺跡の實例
三、年代と樣式
四、甕棺、箱式棺との關係

一　緒言

死者を地中に埋葬する時は必ず土中に壙を掘らねばならぬ、埋葬が行はれる限り、土壙の發生は當然の事象で、最も簡單な且つ原始的な方法と考えられる。我が國の最も古い石器時代からの墓には、こうゆう土壙が當然あつたものと誰しも考えるであらうが、不幸にして繩文文化期の正確な墓壙に關する報告は餘り多く知られていない。石器時代の事は暫く措いて彌生文化期に於ても、こうゆう土壙が問題となつたのは比較的近年の事である。昭和四年頃中山博士は筑前井尻の遺跡で甕棺と共存する小穴阯を墓壙であらうと推論されていたが、[註1]後京都大學の島田貞彦、水野清一兩氏によつてこれの構造を確められた。昭和六年に至つて中山博士は井尻に近い雜餉隈驛隣接地で、工事中の土壙を發見され、その調査の詳細は考古學雜誌第二十一卷第九號に「雜餉隈驛附近に發見せる石蓋土壙と無蓋土壙」として發表される所があつたが、この

劃期的な論文は續稿が掲載されぬまゝに失はれ、その後半の先生の所論が見られぬのは殘念である。この論文が出て以來、石蓋土壙の名が一般に使用され、西日本の各地からボツボツ資料が報ぜられる樣になつた。中山博士の發見から既に二十年以上を經ているけれども、吾々の知見に入つた類例は遺跡にして十指を超えるに過ぎない。これは土壙そのものが著しい土盛りもなく、石蓋を除けば何等特異の遺跡として殘る事がない爲に世人の注意を惹かぬ點もあつて、學術調査も充分行はれていない現狀であるから、今後この關心を呼び起したならば、その資料が增加する事も期待出來ると思う。今僅かの例で結論めいた事を云うには早やすぎると思うけれども、最近新に學友諸氏の調査された資料が增加したので、紹介を兼ねて從來の諸例を類集して見る事にした。

中山博士の命名になる「石蓋土壙」と呼ばれるものは、箱式棺の側石を略した樣な墓穴で、箱形又は舟形の土の掘り込みに平石を並べて蓋としたものである。但しこの蓋が植物質のものであつた場合は腐朽してしまうのが當然で、之を中山博士は「失蓋土壙」と呼んで居られる。又初めから何等の蓋もなく壙に土を被ぶせる例もあり、之は「無蓋土壙」と呼ばれている。墳墓としての壙の蓋の有無に依つてこの樣に三つの分け方がされているが、三者共通の名稱としてかつては「粘土槨」[註2]の名が用いられた事もあつたが、これは高塚古墳時代に出現する「粘土槨」との關係が問題となるので一應保留し、「土壙」の名を用い度いが單なる「土壙」では墳墓であるかどうか不明瞭であるので、「土壙墓」又は「壙墓」と呼ぶ事も出來よう。但しこれにも「地下式土壙」と呼ばれるものや「横穴」も廣い意味の壙墓（アナバカ）になるので、中々適當の名前を附けることは難かしい。ひるがえつて、この種の遺跡を檢討すると、やはり石蓋をするものが最も多いので、石蓋土壙を以てこれを代表させて差支ないとも云えるであらう。

註1　中山平次郎博士「井尻の彌生式遺跡」考古學雜誌第十四卷第十二號

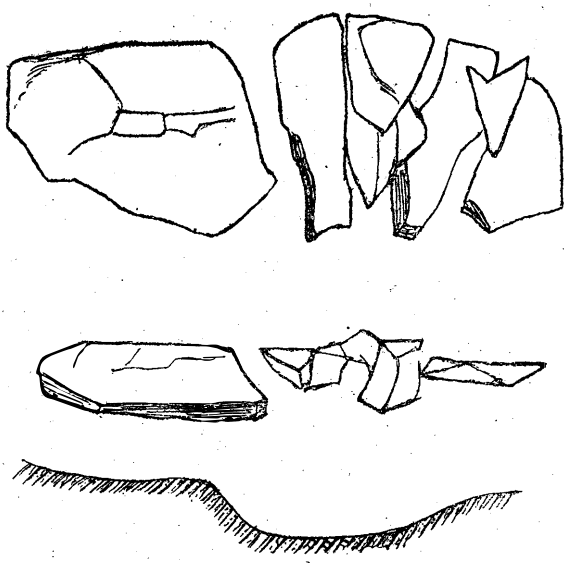
2　水野清一、島田貞彦氏「北九州に於ける甕棺調査報告」人類學雜誌第四十三卷第十號及第十一號

二　遺跡の實例

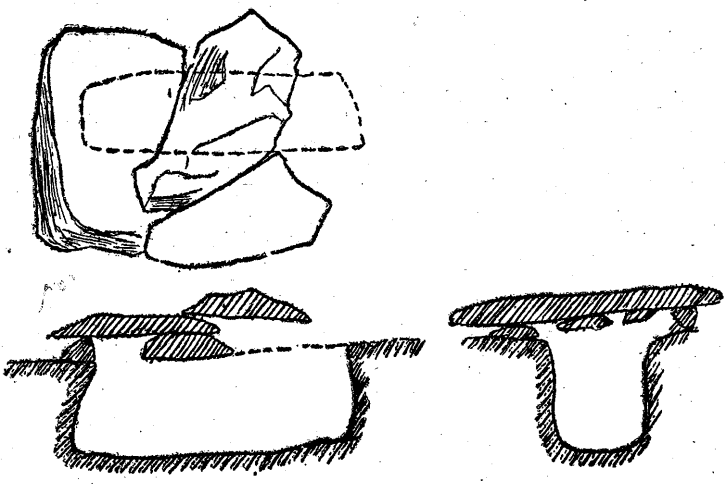
1、熊本縣玉名郡高道村大字山下中道

中道貝塚の調査は昭和二十七年八月十六日より玉名高

第一圖の一



中道第一號壙



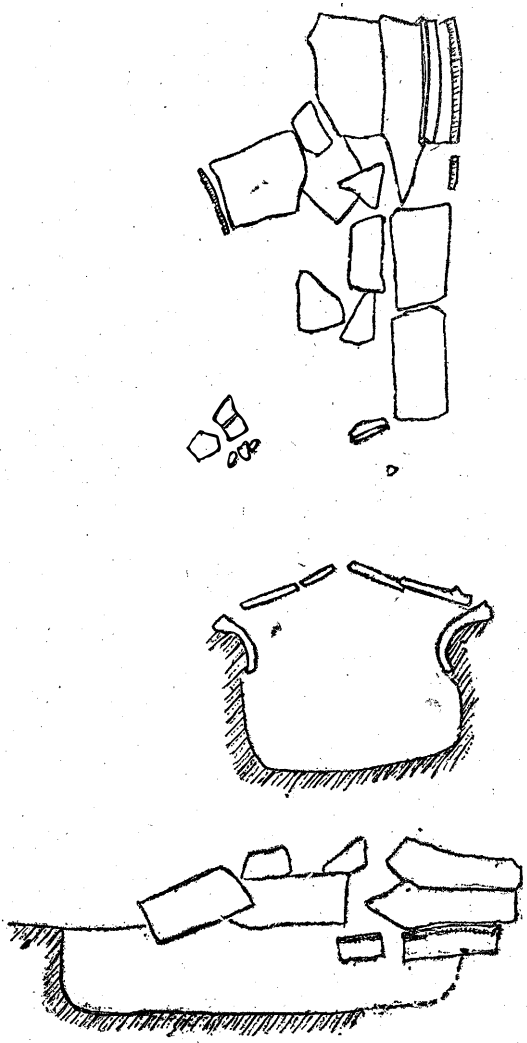
中道第二號壙

校教官田邊哲夫、熊本縣史跡調査委員坂本經堯兩氏等によつて行はれたが、その結果については何れ正式の調査報告書が公表されることゝ思うが、こゝで問題とする石蓋土壙に關する資料は、田邊氏の謄寫印刷「中道貝塚調査概要報告」によるものである。[註1] 遺跡では環濠の彎曲部らしい所に堆積された貝塚と、その外圍に發見された土壙三基が調査された。

土壙については三つの遺構が確かめられたが、二つは石蓋で、一つは坩蓋とも云うべきものである。

第一號――長さ一・九米幅七〇糎に五個の安山岩よりなる石蓋があり、そのうち一個は特に大きい。土壙の兩側は從來露出していたせいかたしかめられず、下底は知り得たが兩方が深く凹んで、壙内より御領式土器數片が發見された。

第一圖の二



中道第三壙號

第二號――土壙は南北の方位を採るが北部の蓋石は持去られていて、現存するもの三個、石蓋と土壙との間には粘土の目張りをしている。壙内より極めて小形の扁平片刄石斧、石蓋上より石庖丁の殘片に加工して扁平片刄石斧に再生したものが檢出された。

第三號――石蓋の代りに厚手の大型坩破片を以て山形に被覆している。他に例のない珍らしいものである。同一の甕の口邊部の破片を上下に合せた所は合口甕棺を思はせるものがある。然しこの土壙を全部覆うだけの土器片ではないので、壙内を再び土で埋めて土器片をかぶせたものであらう。全長七〇糎、幅四五糎であるから、小形の壙で成人を埋葬するには無理ではなからうか。この遺跡の興味ある所は貝塚が堆積した濠を環濠とすれば、濠内部の住居阯の狀況とこの濠外の墳墓群集地との關係が見られねばならぬので、更に調査面積が擴張される機會を望みたい。殊に貝塚より發見される土器が彌生式土器で、大部分が遠賀川式である事は、この土壙の年代の決定に大きな關連を持つて來る。但し現在の段階に於てはこれ等の土壙が何れの時期のものであるかは、直接には土壙を被覆していた第三號の土器の年代が最も決定的な資料となる事を斷ずるに止めなければならぬであらう。

2、福岡縣筑紫郡曰佐村井尻（イジリ）

この遺跡は早く中山博士の調査報告があり[註2]甕棺と土壙が併存していたが、この壙を以て墓穴であらうとされた最初の遺跡であつた。其の後西鐵急行電車が開設される際、この遺跡に停留所が出來て、土採作業によつて現はれた甕棺や土壙もあり、島田貞彦、水野清一兩氏等による踏査が行はれ、人類學雜誌にその報告が載せられている。[註3]これ又黑色土の小穴阯が墓壙であらうと推定された中山先生の推論を實地に證明した最初の報告であつた。

停留所南側の斷崖に現はれた土壙と甕棺の間隔は約八間とあり、土壙は赤土地盤層に切り込まれ、火山灰質の黑色土を充塡しているが、その一つには上部に綠泥片岩の蓋石を存し黑土の下に朱を混じた薄層のあるのが認められた。蓋石は地

下一・二尺、床は地下二・五尺にあり、壙の壁は南の一端に於てやゝ上り氣味で、幅も又前方が既に切り取られているので明かでないが、後方が狹く、端が丸くなっている點、箱形のものと（例えば後述の雜餉隈の例の如き）對照的である。周壁及び床は粘土を以て固められたらしく、殘存部全長約四尺、壙底の幅一尺程度のもので「舟形粘土槨」と呼ばれている。この石蓋土壙と並んで、極めて接近した左右（東西）に無蓋土壙が夫夫又南北に方位して發見されている。副葬品はなかったが、彌生式土器の小破片は何れにも見られたとゆう。

3、福岡縣筑紫郡大野町雜餉隈（ザッシヒノクマ）

鹿兒島本線雜餉隈驛に接するもと渡邊鐵工場構内、現在BS自轉車工場敷地と豫定されている場所は、昭和六年頃初めて工場敷地として地均しが行はれたので、私達も中山博士に御伴して何回か現地に行つて彌生式土器を採集し、それ等の遺物は今九大の考古學資料室に陳列され、一群の遺物として注意されている。構内に竪穴住居阯があり、北方に條溝が掘られてそれより北に甕棺や箱式石棺、石蓋土壙が發見されている。この溝は住居地と墓域を限界する舊時の土工であった事は、當時既に中山博士によって注意されていたが、その詳細な報告は原稿が活字にならぬまゝになっている。先生の注意された土壙は四基に及んで、その詳細は前記考古學雜誌上に論述されている所であるから、その概略を簡單にこゝに引用しよう[註4]

第一號――蓋石二枚を殘して取り去られ長方形箱形の壙も前半は既に破壞されている。蓋石の間や周圍は粘土で目張りを施し、蓋石の下面と壙壁、壙底は赤色の顏料を以て塗られている。蓋石の上には、粘土で目張りした後にこねあげた赤土を以て全面を蔽い更に表土を盛りあげたと思はれる。

第二號――土採り斷面に蓋石二個が殘されて發見されたが、壙底はその一端が確められて長さ一・五七米、幅三四糎の壙と知られた。壙内に彌生式坩一個があり、その位置からみて副葬品として疑ないものであらう。坩は圖の如く或は土師

器に近いものかとも思はれる末期的なものである。第一號の樣な朱痕と赤土の被覆は見出し得なかった。

第三號――壙穴が全く削り去られた後に、四枚の蓋石が殘されていたのに過ぎないので詳細は不明。

第四號――遺跡の北偏の地から石蓋の土壙の破壞されたものと、蓋のなかったもの二つを中山博士が注意されているが實測圖と說明の詳細は續稿に見えると思はれるがその發表がないまゝとなり詳細をうかがうことを得ない。こゝには假に第四號として無蓋土壙のみを一つとして取扱っておく。

4、福岡縣糸島郡怡土村石ケ崎

支石墓でつとに著名になった糸島の平野に望む石ケ崎の丘陵地の墓域に、甕棺と箱式棺（撑石下）と共に土壙三基が報告されている。調査者は原田大六氏で近刊の考古學雜誌（第三十八卷第五號）に「福岡縣石ケ崎の支石墓を含む原始墓地」にその概略が示されている。[註5]

第一號――甕棺によって切り込まれた形跡があるが、深さ二尺一寸底に接してほゞ南北の方位を保つ、長さ一尺四寸、幅四寸の長方形の石を中心に十一個の河原石が認められた。

第二號――深さ一尺、壙底三尺五寸、×二尺五寸の卵形に近い形をしている。壙中には全面に石を置いている。最大のもので（一・二×〇・七五×〇・三）尺位の河原石三十個許りで、壙は舟底形である。

第三號――深さ一尺底徑長さ約四尺幅三尺の壙を穿ち、やはり蔽石がある。偏圓で舟底形である。

右の三つの壙は箱形でなく、平面は長圓形で蓋石なく、土中に屍體を埋葬して後河原石と土を以て充塡したもので、壙の斷面も皿狀の淺いものである事が特徴としてあげられる。中山博士の所謂無蓋土壙にあたるものであらう。

5、福岡縣嘉穗郡幸袋（コウブクロ）町目尾（シヤカノオ）

福岡縣社寺兵事課に史跡事務をとっておられた故島田寅次郎氏の調査談話を、中山博士が前記考古學雜誌に於て紹介さ

れているので、こゝにその概要を引用する。

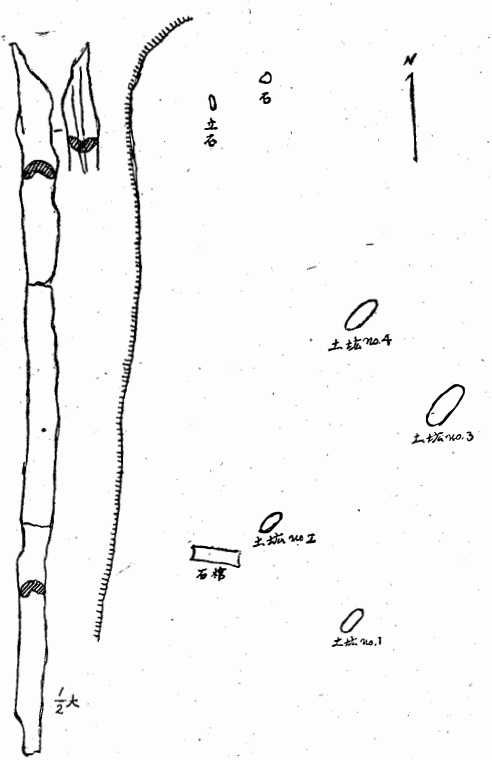
遺跡は台地の上で、多くの合口甕棺とまじつて三ケ所に石蓋土壙が認められたとゆう。但し島田氏が現場に到着された時には二ケ所の土壙は發掘されていたが、一ケ所は殘されていたとゆう。蓋石の下面には赤色顏料が塗抹されていたが、野石三四個を並べ、地表より一尺二三寸の深さに蓋石があり、壙は長さ約五尺、幅一尺五寸、深さ一尺五寸の長方形のもので、壁面は平滑になつていたとゆう。壙底には頭蓋骨及び四肢骨の破片と認められるものを存した外には、何等の遺物も發見されなかつた。

6、小倉市長行（オサユキ）小學校々庭

小倉市に合併される迄は企救（キク）郡西谷村で、長行は紫川の中流西岸に面する丘陵性山塊の緣邊にある村落である。小學校の敷地も河岸の水田面より十米位も高い小丘陵の台地上に位置しているが、昨年校舍建築の地均工事が行はれ、甕棺、箱式棺と共に石蓋土壙が出て來たが、工事を急いだ爲充分の調査が出來ていない。たゞその工事中、小倉高校の田頭喬氏と菅生中學の有野賢正氏等が現場で露出された四基の石蓋土壙を實見しておられるので現地を訪ねて田頭氏よりその說

第二圖　長行校庭土壙石棺配置圖

附　出土鏡器實測　（縮圖2分の1）

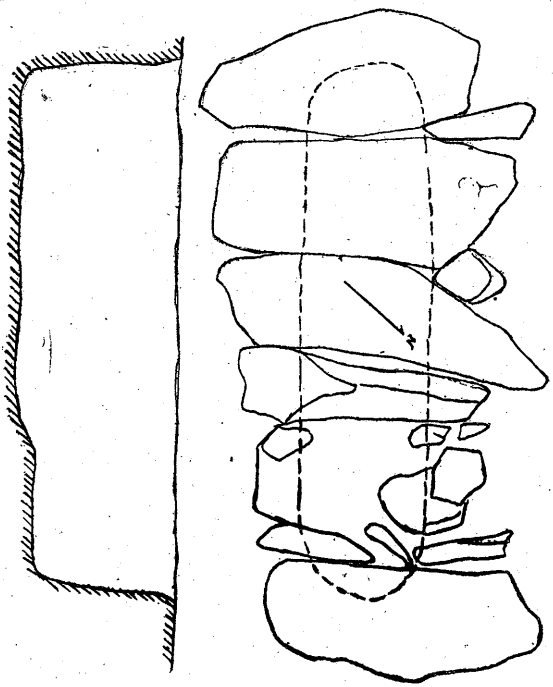


明を聞き、石棺の實測等を行つたので、こゝに報告する資料は凡て同氏より提供を受けている事を斷つておく。[註5]

甕棺は小學校の前庭から發見され、頸の狹い坩に丸底の土器の下半身を被せたもので、兩者を合せても七十糎を超えるものではない。下甕は口邊外面に波狀櫛目を繞らし腹帶二條を持つている上甕と共に菅生中學で復原整理がしてある。櫛目の彌生坩は彌生の末期に近いものと思はれる。頸部の內徑一五糎であるから火葬、洗骨でなければ、初生兒しか容れられぬ。

第三圖　長行校庭第三號土壙實測圖

(縮圖2分の1)



石蓋土壙は後庭から夫々三・三五米——五・五米——三・五米の間隔にあつて四つある。北より第一號乃至第四號と數えると第三號が最も大きく第一—第二號は小さい。蓋石の實測出來たのは第三號のみで、斷面圖を取る暇なく蓋石は取去られたので、蓋石と土壙との關係は圖上では推測である。長さ一・四一米深さ四七糎その一端が三八糎程度の深さになつているので、この方が枕でなかつたかとも想像される。平面圖で兩端は圓形を呈し、壁はやゝ上開きとなつている。土壙中より鐵器一個が採集されている。長さ一九糎、幅九耗の細長い先の尖つたものであるが、根本から穗先まで內刳りになつていて先端部は多少捻れている。用途は明かでないが我が國の前期古墳から發見される鈍に類似の姿を求める事が妥當であろう。

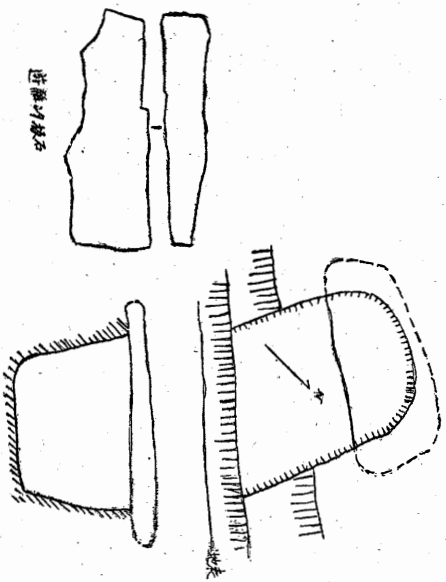
第三號を除く外は實測圖がないが、平面形は大差なく、大きさは第二・三號が七十糎前後、第四號は約一米とゆうから、共に小形である事が注意を惹く。

猶校庭に殘存している箱式石棺一基は九枚の面を取った石で組立てられ、長さ一・五米、幅三六糎深さ四八糎程度のもので棺内より素環頭の小短劍一口（長さ二四糎）が發見された。箱式棺は校庭の西南隅にも壁石らしい立石が掘り出され近くの煉瓦積の小屋の附近にもかつて二基の石棺があったとゆうから、この一角にも計四基の石棺が石蓋土壙と共存していたとゆう事になる。たゞ箱式棺の蓋石が全部實見出來るものがなかったので、土壙の蓋石と比較する資料を欠いでいる事が殘念である。

7、小倉市長行字祇園

小學校と同じ大字内であるが、前記遺跡から北方約七百米の丘陵地上、小祠堂の横に道路が開鑿され、半ばを削り去られた石蓋土壙が露出している。殘存部分からすると、小學校校庭のものとほゞ同じく、蓋石は端の一枚を殘しているのみで、一枚は既に取りはづし土壙の前に立てゝあった。この壞れかけた土壙から十米位先にやはり箱式棺の側石が三枚ばかりかろうじて殘っている。この附近には精査すれば石棺や土壙が未だ多く出て來るであらう。現にすぐ近くの田地の地下げの際に多くの平石を掘り出し、箱式棺があった由を村人が證言している。

第四圖　祇園土壙實測圖
（縮分2分の1）

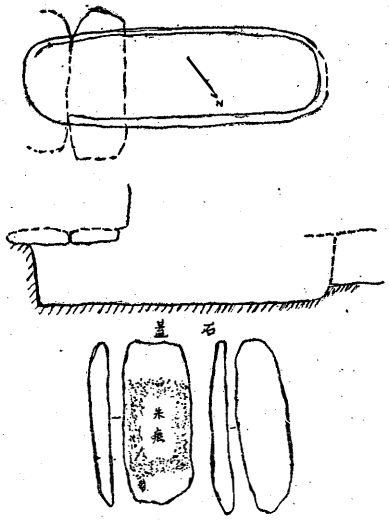


8、田川市夏吉香春隠神社前

市内鐵砲町の西に高燥の丘陵があるが、この台地の上には廣く横穴古墳が散布している。こゝに露出している石蓋土壙は丘陵の東端に近く香春神社と云う小さな神祠の前の鳥居の傍に半を壞されて殘っている。この神社の境内地が小高くなつて盛土の感があり現在の狀況から方墳らしくも見えるが、猶檢討を要する遺跡である。從ってこの土壙も地表から一米の所に蓋石が見える。多分道路擴張の際にでも蓋石が持去られたと思はれるが、二枚だけは土壙の傍に置いてあつた。共に裏側に朱痕が見えるが殊に一枚の石は幅五十糎に鮮かに朱を塗つた跡がみられ、土壙は四十糎の底幅を持つので約十糎の底すぼみになつている事が知られる。底部は幸に削り取られていないので、全長一・六五糎程度のものであつた事が判る。この土壙の北約百米の畑の端には石棺一基が露出していた。

第五圖　夏吉土壙實測圖

（縮圖2分の1）



9、福岡縣京都郡犀川町山鹿

昭和二十七年春、圓墳の封土であると氣づかず土採りした所から石蓋土壙が二基發見され、その一つから出た仿製鏡一面を土地の藤波半次郎氏が所有し、他の一つの掘りあげた土の中から小鐵斧が發見されている。この事は最初同町に居住されている九州考古學會會員の原口信行氏が知つて早速縣當局や私共に連絡があり、土採りの禁止に手を盡されたが、止まず、終に石棺の側石らしいものが露るゝに至つて危險を感じたので、私は田頭、原口氏等と正規の手續を踏んで調査した。何れその結果については公表の機會を持つが、比較的小さな石室で袖石が閉塞した門の外についているのが珍らしい

形式と思はれた。遺物は平根鏃三本を含む鐵片若干だけで、かつて盜掘にあつた跡が歴然としていた。勿論その年代は土壙と石室の間にかなりの開きがあるので、兩者の有機的な關連はないと思はれる。

扨この二つの土壙の平面の形は兩端が丸味を帶び、多分肩の部位と推測される所の幅が最も廣い。この正確な實測圖は製作する事が出來なかつた。それは壙内が攪亂されて埋戻されていたものを再度調査した爲であるが、一種の長楕圓形とも云うべきものであつた。蓋石は現場に放置されたものを見たが五六枚の平石を並べてあつたとゆう。

第一號から發見された鏡は徑十糎の仿製鏡で、銅質精良でなく文様も素雜の感を免がれず加うるに所有者が背文を磨いたりしているので、文様も模糊たるものになつている。蕨手と周緣に内行花文らしい弧文があるがその配置が整然としていない。猶第二號壙のあげ土の中から發見された鐵斧頭は、同形のものが後述の箱式棺内からも發見されている。

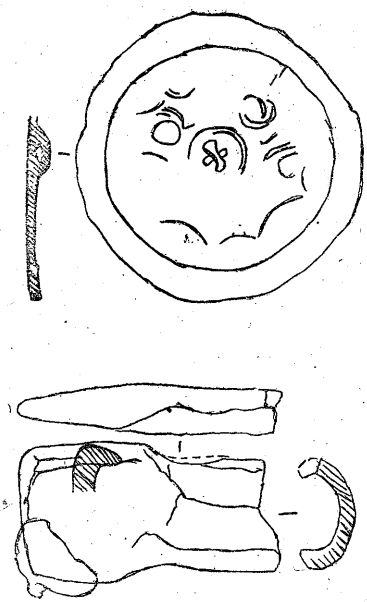
この遺跡は犀川の北に連續する丘陵の一端で小圓墳が群在している。土壙には勿論封土はないが石室の設けられた圓墳の墓底下に埋沒していた。これに近接した（圓墳の中心距離三十米）一圓墳は箱式石棺があり次の如き副葬品が知られている。

鐵斧頭一、小形鐵劍一、小刀子一

碧玉製管玉三、他に未詳鐵器三

第六圖　山鹿土壙發見遺物實測圖

（縮圖2分の1）

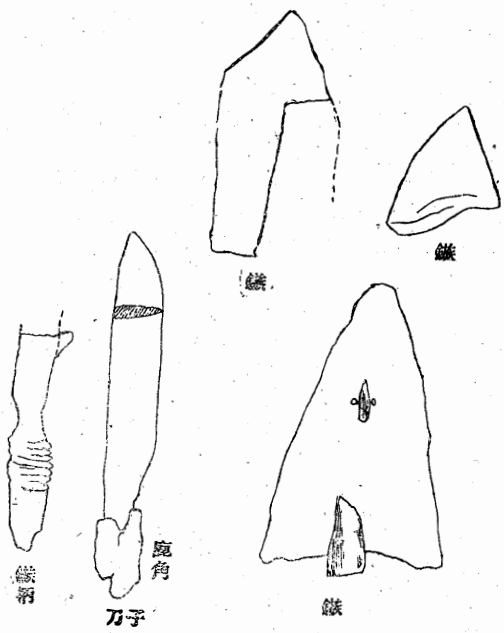


この封土は徑十二米の圓墳であるから箱式棺の年代を考える上にも副葬品と共に考慮すべき點がある。殊に土壙内發見の鐵斧頭が近似している點からも、乏しい副葬品から土壙の時代を決定する場合によい資料となる。

10、福岡縣京都郡犀川町本城大池畔

第七圖　本庄土壙發見遺物實測圖

（縮圖2分の1）



犀川町の南の丘陵に甕棺箱式棺の群在する古式墳墓地がある事は既に紹介して置いたが、原口、田頭兩氏の調査になるものゝうち、土壙が一つある。これも正式の學的調査でない爲構造の正確なものを圖示する事が出來ないが長さ一・八五米、幅四〇糎の箱形の土壙の上に蓋石六七枚を並べたものとゆう、壙底には小石を敷いた狀態が知られ成人骨が伸展葬された狀態が見られたので、その人骨は原口氏の努力により直ちに九大醫學部の金關丈夫教授に鑑定依頼中である。壙内よりの發見品と傳うるものに鹿角製小刀子一、廣形鐵鏃三（完形一殘欠二）がある。

11、大分縣西國東郡高田町來繩（クナワ）

この資料は大分縣杵築高等學校教官入江英親氏の調査によるもので、「史談」第九卷第六號―昭和五年十一月刊―に紹介された論文があるそうであるが、未だその雜誌を見る事が出來ないので、次に同誌の記事を拔萃されて筆者に送られた

入江氏の書信に基いて概略を紹介しよう。

この石蓋土壙は高田町來繩の洪積台地に位して、彌生式土器は包含狀態をなして一帶に埋藏されている。當遺跡は附近にさえぎるものゝない廣い見晴しのよい數米の台地で、その周圍は水田となつて水系の存在を示している。標高は約十七・八米であつて、包含層は表面より五〇糎位下に約二〇―三〇糎の層をなしている。土器はその間に多く集合破損しているが、中に甕棺と考えられる大きな壺形土器が二個口を合せて破損したまゝ埋沒したものがあり、右の包含層中ほゞ水平に横たえられている。兩方合せて一米餘のものである。彌生式土器には高さ十三糎に及ぶ厚手の鼓胴形の器台、口徑三〇糎に達する薄手淺形高杯、皿部、口唇部に於て著しく外方に突き出る細頸坩、刻目凸帶文を有する破片等がある。これ等は甕棺と製作年代を等しくするものと入江氏は認められている。實物を見ない筆者が年代を云々する事は差控えなければならないが右の記述では彌生も中期以降のものである事は云えよう。

扨この包含層の連續の一部に表土下六一糎に石蓋を有しその下空洞にして、その下床に朱が敷いてある。壙の深さは四三糎、幅五〇糎で斷面は舟底形である。蓋石は一種の玄武岩で厚さ六―一一糎である。全長は道路によつて切り取られた所を實見されたので不明である。この土壙が甕棺や彌生式土器と同一層位に發見された事は、特に注意を要する。

12、山口縣吉敷郡大內村御堀

山口市郊外の御堀の石蓋土壙については學友山本博君の報告が考古學雜誌に二回に亘つて紹介されているので繰り返す必要もないがその概要を摘記しておこう。[註7]

遺跡は仁保川北岸に迫つた山塊の突出部斷崖に彌生式土器片が發見された事から、注意され、何れも地下二―三尺の所に蓋の如く板石が並べられた例、及び底には板石を見ずとゆう弘津始氏の談話によつて少くとも三基の石蓋土壙があつたと推定されている。再度の調査によつて又石棺と土壙の並存している狀態を圖示されている。箱式棺と土壙は共にその半

を切り取られているが、壁の間隔は一〇糎ばかりの至近距離に東西位に平行して設けられている。表土からの深さは石棺四〇糎に對し石蓋土壙は二〇糎の深さにある。壙は箱形に穿たれていた様である。

13、朝鮮慶尙南道金海

金海貝塚の群墓に關しては、既に榧本龜二郎氏の調査を紹介する所があつたが、[註8] 箱式棺、甕棺支石墓と共に粘土槨とされた墓壙らしいものが圖示されている。これに關する說明は充分にされていないが、圖によれば兩端の圓い舟形の壙と見える。又近くの鳳凰台の一角道路の切り取り面に石蓋土壙が露出している事が「朝鮮古蹟綜覽」（第一巻）に記述されている。

朝鮮半島の一角に、この種の墓壙が存在していることは甕棺、石棺と共伴する關係に於ても最も注意を惹く所である。

二　總　括

以上九州北部を中心として朝鮮半島、山口縣に亘る遺跡十三ヶ所、數にして二十七基以上の土壙についてその概略を記したが、その一部は工事中に既に失はれたもの記錄の及んでいないもの、又實見する機會と暇を得なかつたものもあつて、時に必要な點を欠いでいるものがあるのを斷はらねばならぬ、以下にこれらの資料を基礎として二三の考察を試みようと思うので、必要事項を表記して觀察の便に供えて置こう。

品	葬	副	甘	式	生	彌	鐵	器（鉋）	鏡	斧	製	仿鐵	鏃、刀子			
大サ	小形						小形 小形 小形									

表覽一墓壙土

第一表

番號	遺跡名	蓋	壙形 舟形 箱形	共存墓
1	中道 Ⅰ	石	舟カ	
	中道 Ⅱ	石	箱	
	中道 Ⅲ	石	箱	
2	井尻 Ⅰ	石	舟	甕棺
	井尻 Ⅱ	失	一	
	井尻 Ⅲ	失	箱	
3	雜餉隈 Ⅰ	石	箱	甕棺
	雜餉隈 Ⅱ	石	箱	
	雜餉隈 Ⅲ	石	一	
	雜餉隈 Ⅳ	無	一	
4	石ケ崎 Ⅰ	無	舟	甕棺
	石ケ崎 Ⅱ	無	舟	支石墓（石棺）
	石ケ崎 Ⅲ	無	舟	
5	目尾	石	一	甕棺
6	長行 Ⅰ	石	舟	甕棺
	長行 Ⅱ	石	舟	甕棺
	長行 Ⅲ	石	舟	
	長行 Ⅳ	石	舟	
7	祇園	石	舟	石棺
8	夏吉	石	舟	石棺
9	山鹿 Ⅰ	石	舟	石室
	山鹿 Ⅱ	石	舟	
10	本庄	石	箱	甕棺、石棺
11	來繩	石	一	甕棺
12	鄕堀	石	箱	石棺
13	金海 Ⅰ	無	舟	石棺、甕棺、支石墓
	金海 Ⅱ	石	一	

註

1 遺跡の概報はプリントの外に昭和二十八年一月十一日九州考古學會で田邊氏の報告があり遺物は玉名高等學校に所藏されているので實見させていたゞいた。

2 中山平次郎博士「井尻の彌生式遺跡」考古雜誌第十四卷第十二號。

同　「井尻及寺福童の甕棺」考古學雜誌第十七卷第十二號。

3 水野清一、島田貞彥氏「九州に於ける甕棺調査報告」人類學雜誌第四十三卷第十號。同十一號連載。

4 中山平次郎博士「雜餉隈驛附近に發見せる石蓋土壙と無壙土壙」考古學雜誌第二十一卷第九號。因に雜餉隈驛は筑紫郡那珂町麥野にあるが遺跡は判り易い爲に雜餉隈の名をとつた。

5 この調査の概要も本年一月十一日の九州考古學會の例會の席上田頭氏より發表があつた。

6 山本博氏「周防御堀出土の彌生式遺物」考古學雜誌第二十六卷第三號。
同　「周防御堀出土の彌生式土器」考古學雜誌第二十六卷第八號。

7 榧本龜次郎氏「金海貝塚、其の新發見」考古學第六卷第二號。

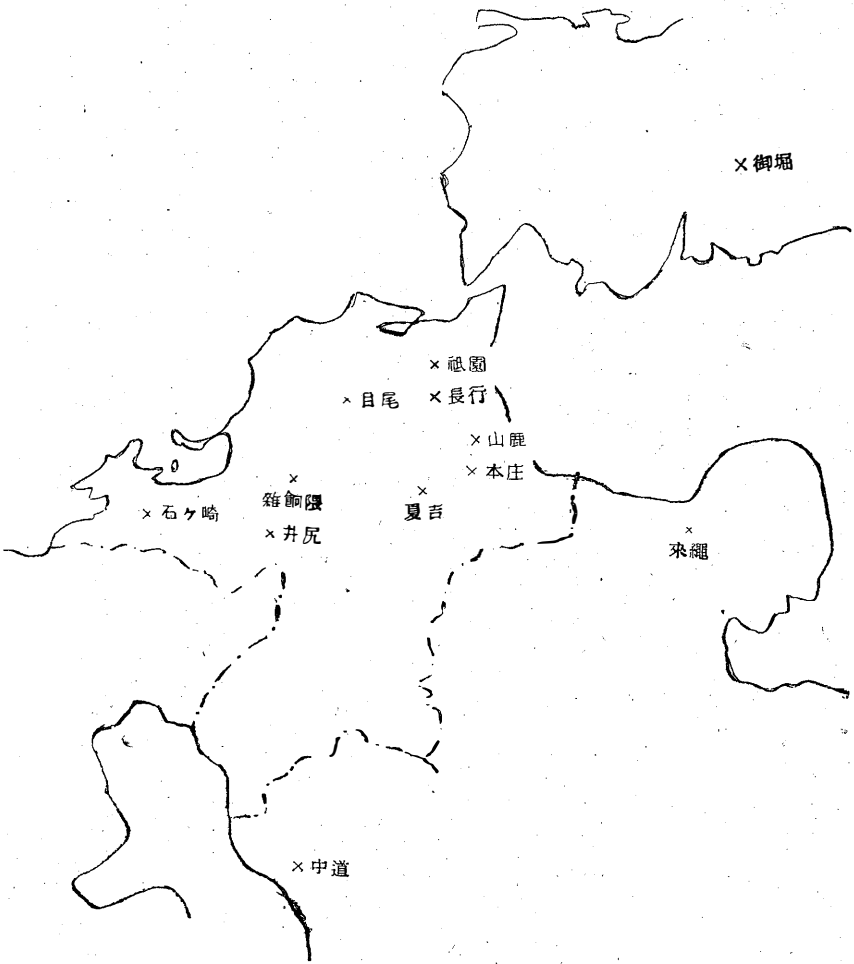
三　樣式と年代

土壙の中から發見される遺物は數多くはないが、その發見される遺跡が甕棺や石棺等の群集墳墓地である事から一應彌生式文化期に關連あるものと考えられていた。然し吾々は乏しい乍ら、前にあげた土壙内の遺物によつて直接にはその年代を推知し得る資料を持つ事が出來る樣になつた。先づ昭和六年中山博士の紹介された雜餉隈第二號壙に於ける彌生式坩が問題となるが、これは副葬品である事は疑なく、甕棺葬に於ても亦土器を以て死者を祭る習俗のあつた事はかつて實例を以て推論しておいたので、[註1]猶確實な例と云えよう。丸底のこの種の土器は彌生の編年から云つてその末期に位置する典型的な形である事も異論はあるまい。雜餉隈の居住阯も亦彌生末期の土器樣相を呈しているので、大觀して居住阯と墳墓とが同一年代のものと云う事が出來よう。井尻の壙内に發見されたと云う土器片も彌生式土器であるがこのあたりの甕棺なり土器から見れば中期或は後期のものとしてよいかと思う。

中道貝塚の第三壙を被覆していた土器は、九州地方には餘り見受けない樣式の大形坩の口邊部であるが、畿内櫛目土器併行の中期と推考した。壙内の御領式土器や石器等は後の混入の疑もあるので採り上げて問題としない。以上の三例が彌生式土器の直接土壙内又は蓋部に發見された例で、中期から末期にかけての時期に比定し得るものである。

次に最近色々な興味ある調査によつて明かとなつて來た豐前地方の遺跡から、土壙の新例と副葬品が一つのグループとして注目を惹いている。長行第三號壙内から出土した鐵製品は斷面が半筒形となつて先が尖つている所から朝鮮金海の甕

第八圖　土壙分布圖



棺や謂原で發見された青銅又は鐵製の利器は似た點もないではないが、[註2]むしろ我が古式古墳から往々副葬品として發見される鉋と見る方が妥當ではあるまいか。

山鹿第一號壙の鏡は、仿製鏡で內行花文蕨手等を薄く鑄出してはいるが、外來の原型から離れた變形文鏡の範疇に入るもので、正確な鑄造年代を知る事が出來ないが、高塚古墳期に入つた遺物である事は推測出來よう。第二號壙から出土した鐵製斧頭も亦彌生期のものとして類例を見ず、古墳出土品に往々發見例があるもので又至近距離にある小圓墳內箱式棺にも類似した形式の斧頭がある所から、これもやはり古墳時代に降つた遺物とせざるを得ないであらう。たゞこの二つの土壙は完全に後の古墳の墳丘下に埋存されているので、上に築かれた石室の年代によつてその下限が決定される、然しこの石室とても內部はかつて盜掘にあつて平根の鐵鏃を含む鐵器小殘片若干が取り殘されているにすぎぬ狀態であるので、石室の構造から年代の手がかりを得る外に途はない、この石室の構造は側壁の一つに一枚石を使用していて箱式棺を大きくした感じを持つている小形石室であるが、又一方石室外に袖石を付けた橫穴式石室古墳の姿も覗えるもので、佐賀縣目達原古墳群中の大塚古墳に類例を求める事が出來る。[註3]大塚古墳は目達原古墳中では比較的古い樣式の樣に見受けられたので、中期を降るものではなからう。

土壙の年代は斯くの如く漠然たるものではあるが、古墳期の前半の或時期に比定し得ることが云えるに過ぎない。最後に最も豐富な遺物を出した本庄の例は大形鏃の形式に就いて年代決定の手掛りを得られる。鹿角柄の刀子は古墳時代全期を通じて發見されるし編年的な形式分類も判らぬので、今は鏃の形式を採りあげて見よう。[註4]

鐵鏃の編年的研究は現に後藤守一氏によつて試みられているので、[註5]同氏の所論に從うと、本庄より出た一つの五角形の肩のある形と、中央に柄をとめる二つの孔を持つ無柄鏃は後期古墳のものとされている。この本庄の例は吾々の知り得た土壙中では最も時代の降つたものと云えよう。

以上は直接土壙内より發見された遺物によつてその年代を推論したのであるが、遺跡に於ける他の樣式の墳墓や出土品によつても、間接的な見通しをつける事も出來る。殊にこの土壙が切り離された單獨墳墓でなく、群集墳の一つとして理解される點から考えても、周圍の狀況を一應見ておく事も必要であらう。この場合、外圍から示唆される年代は、絶對的のものでない事はやはり警戒しておかねばならぬであらう。從つて、以下に述べる年代考定は前述のものに比べて、第二次的な意味を持つものである事は勿論である。

最初に中道遺跡の例は前にも述べた樣に、遺跡として彌生式古期の土器を豊富に出しているので三例の土壙中これ等の期時に相當するものもあるかも知れぬと云う推察も抱かれる。この墓壙の年代を決定するには、猶周邊の環濠内の居住阯や支石墓らしいものゝ學術調査を俟つべきであらう。

糸島石ケ崎の群墓に於ては二十三個に及ぶ甕棺の形式分類では、古きは夜臼式より彌生の初期中期後期に亘る長い時期に編年されるので、その何れの時期に該當するかは猶研討の必要があらう。これはむしろ土壙としては特殊の形をしているので、土壙自身の編年的な考察から取りあぐるべき餘地を殘している樣である。土壙墓地域に伴つて發見される墳墓樣式のうち最も數の多いのは甕棺である。朝鮮を含めて十二ケ所の遺跡で甕棺の見られないのは熊本縣中道、小倉市祇園、福岡縣夏吉、山鹿、山口縣御堀の五ケ所である。而も中道と御堀では彌生式土器が附近より發見されているので、これも甕棺と同じ意味を持つことになる。所でこれ等の甕棺の大部分は彌生中期及び後期のものであるが、前期のものとして中道、石ケ崎が注目される。又末期の樣相を持つものは小倉市の長行校内甕棺がある。かくして第二義的な意味を持つものと併せ、土壙墓の年代を次の如く圖示することが出來るであらう。

第二表　土壙年代表

遺跡	彌生期 前	彌生期 中	彌生期 後	彌生期 末	古墳期 前	古墳期 中	古墳期 後
中道	一	×					
井尻		——					
雜餉隈			一	×			
石ケ崎	——	——					
長行				一	×		
山鹿					×	>	
本庄							×
御堀		——					

備考　×副葬品による時期
　　—共存遺物による時期

土壙の形は既に述べた様に箱形と舟形とに大別される。箱形とは箱式棺の如く長方形の壙を穿つもので、これには殆んど石蓋がある。又無くても失蓋土壙の類である。構造の上からも箱式棺と深い關連がある様に見える。

第二の舟形と假稱する形式は長軸をとつて前後の端末が丸味を持つて掘られ、左右の壁も上擴がりの傾斜を持つものである。その壁の傾斜が最も著しいものは石ケ崎の例で、舟底と云うにふさわしい形をとる。豊前地方ではこの傾斜が直壁に近いものもある。この二つの形式の年代的な關係は、表記の様に箱形が彌生後期（雜餉隈）と古墳末期（本庄）にあるのに對し、舟形が彌生中期から古墳前期に及んでいる點からこの方が基本形式かとも思はれる。但しこの關係は將來新しい資料が增加すれば猶反省を要する時期が來るかも知れぬ。兎も角土壙は舟形の方が多い現狀である。箱形の壙は當然箱式石棺との關係に於て猶考慮される面が殘されているので、後に述べる事にする。

舟形は人體を容れるに最も適した形であらう。即ち肩部に於て最も廣く、兩端部が狹く平面形に於て長楕圓形となるのは自然の姿であらうが、土壙の原始形態がこゝに云う様な姿で現はれるとは限らない。そこには箱形の隅角をにぶくした所から舟形が發生すると云う逆な考え方も今日の段階では全然否定し去る事も出來ない。從つてこゝでは時代的或は地理的な特性を强調せずして、兩様式の併存する事實を述べるに止めよう。

次に蓋の問題であるが、原則として土壙は石蓋を持つている。この蓋石には安山岩、綠泥片岩等の板狀節理を持つものが多く擇ばれているが、その數は通例五六枚並列してすき間を粘土で塡める手法がとられる。これは箱式石棺でも同様に

見られる所である。內面に朱を塗る事も亦箱式棺類似であり、朱は從來の報告された限りでは酸化鐵である。

無蓋土壙の實例は石ケ崎であるが、これは元來蓋なくして屍體の上に大小の石を蔽つて更に土を被せたものと思はれる。この遺跡では甕棺にも亦小石をつめる例があり原田氏のあげられた實例によるもその有無によつて特に時代的な區別がされる樣にも見えぬ。云はば淺い皿狀の凹みを持ち、壙の平面形も幅の廣いものであるから箱式棺の姿から最も遠ざかつたものと云えるであらう。もともと蓋のない土壙墓は考え方によつては最も原始的なものと云えるかも知れぬ。即ち後述の如き石器時代の墳墓が圓錐形の墓穴を掘つて土を被せたとする類例を引用すれば、まさに原初の姿に近いものであろう。然し吾々のこゝに觀察している土壙墓の諸例は、甕棺や石棺に支石墓を伴つている墓地に存在する事を忘れてはならぬ。他の考え方から云えば、石蓋土壙の簡略化されたものが無蓋土壙であるとも云えるのである。恰も合せ甕が單甕になる樣に。石蓋土壙の發生源流に就いては猶後に考える所がある。

註1　史淵第五十三輯拙稿甕棺累考(一)。

2　梅原末治博士「一種の尖頭青銅器について」考古學雜誌第　卷第　號。

3　佐賀縣史蹟報告書第九册「目達原古蹟群」

4　神林淳雄氏「刀子について」人類學雜誌第十四卷第七號。

5　後藤守一氏「上古時代鐵鏃の年代研究」人類學雜誌五十四卷第四號。

四、甕棺と箱式棺との關連

石蓋土壙の分布は上述した樣に北は朝鮮半島の一角金海から西は山口市御堀に及び、南は熊本縣北部中道、東は大分縣の北部來縄に達しているが、他は福岡縣內で九ケ所を數え分布圈の中心をなしている。この分布圈は彌生式甕棺の分布圈とほゞ一致する所で、且つ又箱式棺の最も濃厚な分布圈でもある。發見數は甕棺、箱式棺に比べて最も少いが、發見される遺跡に於て三者が共存している事が多い事も既に述べた所である。群集墳墓が他に營まれて地表に特に著しい墳丘がな

い點も三者共通する性質である。甕棺や箱式棺に幼少兒を埋葬したと考えられる小形棺の存在が注意される事も屢々論じたが土壙に於てもやはり成人を容れる事の出來ない小形のものがある。中道や長行の例の如きがそれである。未だこれ等の小形土壙から人骨の採集出來た實例を知らぬが、これも我が原始墳墓にみられる一つの特性を表示するものであらう。

箱式石棺が彌生の文化期から古墳時代に至る迄連續して構築されている事は確かに云える事である。西日本では高塚古墳の時期に於て圓墳又は前方後圓墳に包藏されている例が知られている。既に一方に於て大小の封土内に存在する箱式棺があつて豊富な副葬品を出しているのに、他方では封土を持たぬ副葬品に乏しい箱式棺も永く存續していた形迹がある。筆者の實見し得た例では次の如きものがある。

福岡縣京都郡郡稗田村稗田　鐵鏃[註1]

大分縣大分郡由布院町桑屋　直方

福岡縣三池郡高田町飯尾山頂　須惠器[註2]

石蓋土壙も亦こう云う傳統に沿つて、高塚古墳のはるがに降つたものさえ（例本庄）見出されている。これは石蓋土壙の盛行する時期が彌生期にある事を否定するものでない事は勿論である。甕棺の存續した年代に就いては何れ稿を改めて論及しようと思うが、彌生の終末期から降るものは殆んど無いと云つてよいであらう。この年代觀から考察すれば、石蓋土壙はより多く箱式石棺に併行的であると云う事が出來るであらう。論者はかつてこの土壙墓を「粘土槨」と呼び以て高塚古墳期の「粘土槨」と關連を求められ樣とされたが、近年の調査によれば粘土槨なり粘土床は木棺の床を包む施設の樣であるから、直接の連絡を見出す事には困難を感ずるに至つている。果してこれ等の土壙墓が箱式棺と相關連しつゝ併行關係におかれるとすれば、箱式棺の發見される地域の中國四國方面に於ても更に多くの類例に接するものではないかと思うが、わが北九州の土地でもこれが注意されたのは近年であり、未調査の地形が多く殘されているとゆう感も深い。又實

例が判つていても筆者の知見に及ばない點もあるかも知れない。殊に將來この地方の古式群集墳の調査が進捗して又新しい資料が增加する事を期待している。次に箱式石棺が石蓋土壙と近密な關係におかれるとすれば、その起源に遡つて何れを先とするかゞ問題となる。土壙墓が土中に壙を掘つて屍體を埋める原始的な姿とすれば、これを以て土壙墓を最初に置かねばならぬであらう。然し今日吾々は日本の島國でこれ等の墳墓が獨自に發達し得たかに疑問を持つものである。箱式棺は初期に於てはその副葬品をみても外來要素の强いものであつて、半島の墳墓樣式に刺戟されて盛行したものと解される。さすれば無蓋土壙→石蓋土壙→箱式石棺とゆう發達系譜を描かなくても濟む事であらう。更には又こゝに石器時代の墓壙から延長して彌生期の土壙を想定する必要もないであらう。

然らば又逆に箱式棺→石蓋土壙→無蓋土壙とゆう線を辿つたら如何であらう。箱式棺から石蓋土壙が發生したとする考えの方がむしろ誰でも考え易い傾向を持つている。それは壙の形の上でも箱式石棺の壁石を略して簡單化したものが石蓋土壙であると考え易いからである。然し吾々が前にあげた壙の形は、今日の實例から云えば舟形を呈しているものを基本方式と認めたいのであるから、箱式石棺との關係は併行關係と考え發生論的な前後關係を求めるには論據が充分でない。しかし年代から云つても併行關係を示しているので土壙が箱形を呈する事もあり得た事である。

石蓋土壙が以上の樣に箱式石棺の變形としてゞなく獨立した墳墓樣式として取り扱はれる立場を主張出來るとすれば、これに葬られる人々の社會的な方位如何が問題となるであらう。

元來土中に壙を穿つて死者を直接これに葬る事は、古來土葬の行はれる所では、最も簡單な方法であらう。然しながら吾々はこの樣な土壙が彌生式時代に於ても、せいぜい前に數えあげた程度の石蓋土壙が注意されたにすぎない。他の最も多かるべき土壙一般は殆んど知られていないと云う事は不可解な感さえ懷くのである。その數が最も稠密に群集する甕棺墓地に於てさえ、凡ての死者がこれに葬られるのではなかつた事は既に之を論じた。限られた人々の墳墓の外に、甕棺な

りそれよりずつと少い箱式棺に葬られる以外の人々は果して如何なる墳墓を持つていたであらうか。庶民と云う言葉がこの場合に適當するか否かは問題であるが、棺に入れられない人々の墓穴が方々に隱されているとゆう想像が出來ない事もないが、未だ吾々はこの樣な一般階層の凡ての墳墓に關しては未知の廣野にさまよう現狀である。反つて繩文文化期の墳墓に就いての知見がより豐富である事も奇異の現象である。繩文後期の頃の群集墳墓の存在した事は、人骨の多くの調査が發表されているので知られるが、土中に埋葬するに當つての壙穴についての記述は餘り多くない。清野謙次博士によれば愛知縣吉胡貝塚に於ては、「斷面を造ると人骨埋沒部は貝層下部から小さな竪穴狀の凹み部分が鈍圓堆形狀に穿たれて、其の中に人骨が埋沒されていた」のであつた。[註3]

貝層中の人骨埋葬は、この墓壙をたとえ掘つたとしても確認する事は困難であらう。この樣な狀況であるから、彌生期の土壙が先行文化期の墓壙とどうゆう關係になるか明かにされない。これ等の土壙内に於て發見される遺物は必ずしも豐富と云う譯にはいかない。然し同じ時期の甕棺や箱式棺にしても副葬品を持つものは全體の一パーセントにも滿たないものと考えるので、特に土壙の遺物が少いとゆう歸結は出て來ないであらう。少い乍らも二三の副葬品が發見されていることは被葬者に對する何程かの重葬觀が指示されているものである。殊に土壙の掘穿と、朱を塗り粘土で目張りをなす等手の込んだ工作もとられているから、石器時代の樣な壙を掘つたまゝ埋めるといつた簡單なものでもなかつたのであつた事を改めて認識する事が必要である。

石蓋土壙は僅かの失蓋、無蓋を含めて原始墳墓樣式に於ては數少いものであつた。甕棺、箱式石棺と伴つて一つの埋葬樣式として彌生期の群集墳墓に共在するものがあつて、その原始的な姿にかゝわらず、必ずしも原始墳墓の主座を占めるものではなかつた。その跡を又後の古墳時代に迄引く事は、箱式石棺と最も近い關係におかれた事を物語るものであらう。

註1　何等封土を持たぬ箱式棺内より鐵鎌一個を採集した。

2　その構造は「北九州古文化圖鑑」第二輯參照、棺内より發見遺物は無かつたが棺外に須恵器の散布著しく石棺の年代を示唆している。

3　清野謙次博士著「日本古代人骨の研究に基く日本人類綱」一四四頁。